



Data
監督：中島哲也
脚本：中島哲也、門間直裕、唯野未歩子
原作：深町秋生『果てしなき渇き』（宝島社刊）
出演：役所広司／小松菜奈／妻夫木聡／清水尋也／二階堂ふみ／橋本愛／國村隼／黒沢あすか／青木崇高／オダギリジョー／中谷美紀

👁️👁️ みどころ

湊かなえ原作の『告白』（10年）の映画化で日本アカデミー賞最優秀作品賞等4部門を受賞した天才・中島哲也監督が、今度は深町秋生の小説『果てしなき渇き』に挑戦！この小説はなぜ「映像化不可能」と言われていたの？それは、本作を観ればよくわかる。

このスピードと極彩美、この狂気とバイオレンス、そしてクソ親父と17歳の女子高生の娘との世代の断絶に注目！娘はバケモノだ。俺がきっと見つけ出す。そして、俺の手で……。そんなストーリーが狂気なら、役所広司演じるクソ親父も狂気。

善人たちであふれかえり、予定調和の中でしか生きられない日本人が増殖している今、あえてこんな異色の映画の価値は大きいはずだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■中島哲也監督が、「悪魔のような小説」に挑戦！■□■

2011年の日本アカデミー賞で最優秀作品賞を含む4部門を受賞した中島哲也監督の『告白』（10年）は、言うまでもなく湊かなえの原作を映画化したもの。4月13日に観た『白ゆき姫殺人事件』も湊かなえの原作を中村義洋監督が面白いエンタメ作品に仕上げていたが、『告白』はものすごい衝撃作だった（『シネマルーム25』51頁参照）。中島監督の『パコと魔法の絵本』（08年）はイマイチだった（『シネマルーム20』246頁参照）が、『下妻物語』（04年）（『シネマルーム4』323頁参照）は面白かったし、『嫌われ松子の一生』（06年）も最高傑作だった（『シネマルーム10』36頁参照）。

このように、中島監督作品を並べてみて気付くのは、本作を含むすべてが原作の映画化

だということ。すなわち、『パコと魔法の絵本』は後藤ひろひとの『MIDSUMMER CAROL ガマ王子vsザリガニ魔人』、『下妻物語』は嶽本野ばらの『下妻物語』、そして『嫌われ松子の一生』は山田宗樹の『嫌われ松子の一生』が原作だ。

しかして、本作の原作になったのは、第3回「このミステリーがすごい！」大賞（04年）を受賞した深町秋生のデビュー作『果てしなき渴き』。これは累計発行部数36万部を超えるベストセラーを記録しながら、一方でその激しい描写から映像化は不可能だと考えられていたらしい。現に、中島監督自身が読後の印象として「悪魔のような小説です」と語っているくらいだが、それは一体なぜ？それは本作を観ればすぐわかる。そんな中島監督の挑戦にまずは拍手！

■□■なぜ役所広司がこんな役を？他の俳優たちは・・・？■□■

役所広司は今や日本を代表する俳優だが、本作で彼が演じる元刑事の藤島昭和は狂気とバイオレンスの固まりのようなクソ親父。よくこんな男を日本の警察が刑事として採用したものだと思うほど酷い男だ。原作を元に脚本を仕上げた中島監督自身、「こんな酷い作品に誰も出てくれるわけがない。封印せざるを得ないだろうと、半ばあきらめていた」という状態だったが、ダメでもともとと思って脚本を渡したところ、役所広司の反応は違っていたらしい。「中島監督の作品には酷い人間がたくさん出てくるが、その中でも藤島はNo. 1と言っていいくらい最悪な男。こんな役柄をやらせて頂けるなんて役者冥利に尽きます」と言って出演を快諾してくれたわけだ。なるほど、なるほど。役所広司は1956年生まれだからポチポチ還暦の年だが、妻・桐子（黒沢あすか）と離婚し、刑事を辞めて今は警備会社に勤め、今なお狂気とバイオレンスに満ち溢れているクソ親父・藤島役を熱演している。

本作に出演するのは、他に『嫌われ松子の一生』で素晴らしい演技を見せた中谷美紀を含めて、素晴らしい俳優ばかりだが、本作の役柄は全員ケツタイな人間ばかり。こんな役柄が定着すれば、俳優としてマイナスになるのでは？そんな心配もあるが、やはり俳優はケツタイな役をしっかりと演じることができてこそ一流というものだ。そういう意味では、本作でスクリーンデビューした藤島の一人娘・加奈子を演ずる小松菜奈を含めて、演じ甲斐があろうというものだ。

極彩色豊かな映像の中で、スピーディーに展開していく狂気とバイオレンスに満ちた本作は、クエンティン・タランティーノ監督ばりの展開だから、疲れるといえば疲れるが、ひと時も目を離すことができない緊張感にあふれている。人によって好き嫌いは分かれるだろうが、制作委員会方式による予定調和的な邦画があふれている現在、やはりこんな映画は衝撃的！こりゃ必見！そして当然星5つ！

■□■大人の世界VS娘たちの学校の世界■□■

5月7日に観た『捨てがたき人々』（14年）では、大森南朋が「生きてることに飽きちゃった」どうしようもない男を演じていたが、本作冒頭に見る藤島の自暴自棄で暴力的な生活はそれ以上。そりゃ妻の不倫には腹が立つだろうが、だからといって誰かれとなく当り散らしたり、車の中で楽しげにキスを交わしている男女に向かって、車を激突させる行為はいかがなもの。こりゃ当然傷害罪に該当するし、元刑事という肩書がマイナスに働けば執行猶予はつかず、実刑の可能性も……。そんな弁護士の視点はともかく、こんな導入部はあくまで本作の主人公・藤島の凶暴性・バイオレンス性を見せつけるためのものらしい。なるほど、こんな男なら警察の取り調べから解放されて戻ってきたアパートの汚れっぷりが『捨てがたき人々』の主人公以上であることにも納得。そこに、意外にも別れた元妻・桐子から、娘の加奈子が失踪したとの電話が入ったところから何ともややこしい物語がスタートすることになる。

藤島がまともに刑事生活を送っていた時は、刑事の仕事に忙しく、娘のことなど考える暇はなかったから、年頃の女の子がどんなことを考えているのかわかるはずがなかったのは仕方ない。そんなことは、桐子が誰よりよく知っているから、今さら藤島に「ひょっとして娘がそちらに行っていないか？」と電話すること自体がナンセンスだが、非常事態ともなればそれも仕方なし……。藤島が半分刑事時代の気分を思い出しながら、桐子が加奈子と共に暮らしていたマンションの中に入り込み、加奈子の部屋の中を家宅捜索(?)してみると、なんと加奈子のカバンの中からは、参考書と共にビニール袋入りのシャブと見知らぬ少年との2ショット写真が。こりゃ一体ナニ？女子高生の加奈子は、容姿端麗な優等生じゃなかったの？

アブデラティフ・ケシシュ監督のフランス映画『アデル、ブルーは熱い色』（13年）（『シネマルーム32』96頁参照）は女子高生の同性愛を、フランソワ・オゾン監督の『17歳』（13年）（『シネマルーム32』103頁参照）は女子高生の売春というテーマを描いた問題作だったが、今どきの17歳の女の子は日本だってフランスと同じように何かとワケあり……。いかにもワケ知りのように振る舞っているが、実は最悪の父親・藤島の世界と、一見容姿端麗な優等生と思われていた17歳の女子高生・加奈子の世界とは全く異質なことが、このシークエンスからよくわかる。ここで藤島は桐子に対して「必ず俺が見つけ出してやる！」とタンカを切ったが、刑事でもない藤島に今更どんな捜査ができるの……？

■■■ 朱に交われば・・・？「教育」の重要性を再認識！ ■■■

本作には、『ヒミズ』（11年）で私が「第2の宮崎あおい以」と称した二階堂ふみ（『シネマルーム28』210頁参照）が加奈子の中学校時代の同級生・遠藤那美役で、また、2013年のNHK連続テレビ小説『あまちゃん』で国民的人気を集めた美少女・橋本愛が加奈子の高校時代の同級生・森下役で出演している。この2人には十分注目してもらい

たいが、今どきの中・高校の女の子の生態（性態？）は理解不可能だ。本作は、加奈子の失踪と藤島によるその捜索という現在進行形のストーリーと、3年前の加奈子たちの学園生活のストーリーが同時並行で描かれる。そして、2ショットで加奈子と一緒に写っていた男の子が、いじめられっ子のボク（清水尋也）だということがわかるが、加奈子に片思いをしていたらしいボクの心理も生理も65歳の私には理解不可能だ。また、緒方という男の子が中学2年生の時に一足先に自殺してしまったが、ボクがギリ人間なのは加奈子がここにいるからだそうだが、さてその実態は？

中・高校生の男女関係はややこしいが、女同士の関係はそれ以上にややこしい。したがって、藤島がしつこく森下に食い下がっても、森下からは「あのう、加奈子のことホントに知ってます？」と反駁されると、それ以上の突っ込みは難しい。遠藤、松永（高杉真宙）の2人は、ヤクザとの繋がりもあるヤバい輩らしい。しかも、部屋の中にあつた処方箋によれば、加奈子は神経科の辻村医師（國村隼）のところに通院していたようだが、そこでどんな薬をもらっていたの？中島監督は本作の加奈子役に抜擢した小松菜奈を「その姿を見た瞬間、加奈子を確認した！」と絶賛している。たしかに本作に見る加奈子はミステリアスさでいっぱいだ。ひょっとして加奈子は、かかりつけの中年ドクター辻村を女の色香で誘惑？さらに、ひょっとして藤島と近親相姦？そう思わせるシーンまで登場するが、私の目にはその女優としてのインパクトはイマイチ。『ヒミズ』で見た時の二階堂ふみほどのインパクトはない。

それはともかく、『アデル、ブルーは熱い色』や『17歳』を観た時はフランスの女子高生の自立ぶりに感心したが、本作に見る加奈子や遠藤、森下たちの中学高校の学園生活を見ていると、朱に交われれば・・・？と考えざるをえない。しかして、「教育」の重要性を再確認！

■□■藤島是最悪の親父だが、この刑事もあの刑事もヘン！■□■

ヤクザと警察が裏でつるんでいる話は映画によく登場するが、本作にも、石丸組若頭・咲山（青木崇高）と大宮北署刑事の浅井（妻夫木聡）らが裏でつるんでいるのではないかなと思われるシーンがたびたび登場する。今は警備会社に勤めている藤島が本作冒頭に警察で執拗な取り調べを受けていたのは、深夜のコンビニで起きた3名の惨殺事件の第一発見者だった藤島自身が疑われてしまったため。もちろん藤島はその犯人ではなかったが、藤島が一人で加奈子探しのための無茶苦茶な捜査を続ける中で、シャブを加奈子に渡したのは松永ら不良グループに違いないとらんだ藤島は、松永を追う中、自分自身が泣致られてしまったから、お笑いグサだ。

そこに登場したのが、なぜかかつての後輩刑事だった浅井だが、そこで浅井は藤島にコンビニで起きた殺人事件に松永がかかわっているかもしれないとリークしたから、アレレ？これって一体ナニ？冒頭のコンビニ殺人事件も、中・高校生を巻き込んだシャブ事件

も、すべてひょっとしてヤクザとつるんだ警察が絵を描いているの・・・？さらに、藤島が森下から受け取ったキーで駅のコインロッカーを開けてみると、そこには茶封筒に入った数十枚の写真が入っていたが、さてそこには何が写っていたの？藤島は最高のクソ親父だが、いつもニヤニヤしながら藤島に対して皮肉っぽい言葉を投げかけてくる浅井刑事もかなりヘン。そもそも、刑事にはタバコが似合うものと相場が決まっている(?)が、浅井はいつもあめをしゃぶっている。すると、こいつは、頭のいいガキがそのままエリート刑事になったようなもの・・・？

さらに、本作には、オダギリジョーが大宮北署刑事・愛川役でクライマックスシーンに突如登場し、殴り合いだけではなく拳銃、ナイフを使った死闘を演じるが、この愛川刑事もかなりヘン。中島監督は本作にそんなヘンな人間ばかりを登場させているので、それにも注目！



© 2013 Zuzu Licensing, LLC. All rights reserved

■□■久々の黒沢あすかの演技に注目！■□■

本作で辻村医師を演じた國村隼は、本作でも加奈子の若い女の色香に迷わされてしまう業をもった悲しい中年男をうまく演じている。これは、『許されざる者』(13年)で彼が演じた元長州の侍・北大路正春の怪演(『シネマルーム31』88頁参照)とよく似たもので、國村にはこんな役が実によく似合っている。

他方、私が本作で注目したのは、塚本晋也監督の『六月の蛇』(03年)で素晴らしい魅力を見せつけた美人女優・黒沢あすか(『シネマルーム3』359頁参照)が、本作前半に藤島との間で見せる「死闘」。離婚した元夫に失踪した娘の調査を頼まなければならないこ

と自体が屈辱的なのに、家の中に入り込んできた元夫からレイプまがいの肉体関係を強要され、暴力の限りを尽くされたのではたまったものではない。『嫌われ松子の一生』、『冷たい熱帯魚』（11年）、『ヒミズ』でも脇役ながら彼女の演技を私は注目していたが、本作で見せる役所広司との「死闘」は見ものだ。役所広司も疲れるだろうが、黒沢あすかもこんな演技は相当疲れるはず。久しぶりのそんな黒沢あすかの演技に注目だが、後半からクライマックスにかけてはこの桐子の役割が何もなくなってしまうのは、脚本上少しさびしい気が・・・。

■□クライマックスでの中谷美紀の存在感に注目！■□

中谷美紀演ずる加奈子の中学時代の担任教師・東里恵も藤島の聴き取り調査の対象だったが、当初の通り一遍の聴き取り調査からは、加奈子失踪の原因について何の成果も得られなかった。しかし、自身がヤクザの咲山に捕えられてボコボコにされながら、あくまで泥臭く加奈子失踪の原因を突き詰めていく中で藤島が最後にたどりついたのが、加奈子の中学時代の担任だった東里恵だ。

本作は、「映像化は不可能」と言われていた原作であるうえ、加奈子たち世代の女の子たちのモノの考え方や行動心理、さらにおっさんたちをその魅力に取り込んでいく生態と性態のあり方がよくわからないので、理解が難しい。しかし、藤島による危険を省みない、ワケのわからない突破力をもった捜索のおかげで少しずつ明らかになってきたのは、加奈子は優等生の女子高生などではなく、バケモノのような女だということだ。とは言っても、そのバケモノぶりの実態は私のつたない表現力ではなかなか表現できないので、それはあなた自身の目で確認してもらいたい。

とはいっても、弁護士の私がかつて女子高生売春事件を担当し、見事に「無罪判決」を獲得したことがあるので、加奈子のような年頃の女の子がヤクザとつるんで金儲けをする源泉は、そのピチピチした肉体にあることはよくわかる。したがって、藤島の捜査の結果少しずつ判明してくるのは、加奈子は「その手の行為」に手を染める中で、シャブと出会ったうえ、仲間を次々と引き込んでいった悪魔のような女の子だったらいいということだ。先生をしている里恵だって、かわいい女の子の母親だから、自分の娘が加奈子のようなバケモノの手によって、オッサン相手の売春行為に走っていたことを知らされると・・・。

本作はクライマックスに至って、そんな真相(?)がチラホラと明らかにされ、加奈子の失踪に里恵が大きくからんでいたことが明らかにされていく。藤島はそんな加奈子の行方を「必ず俺が見つけ出してやる！」と必死に探しているが、同時に「そして、俺の手で・・・」と公言しているから、そんなバケモノのような加奈子を見つけて出したら、藤島は加奈子をどうするつもりなの？ 他方、中谷美紀は現在放送中のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』ではあくまで官兵衛のよき女房役に徹しているが、クライマックスにおける藤島との絡みでみせる東里恵の素顔は・・・？ 本作では、クライマックスにおけるそんな中谷美紀の存在感に注目！